

Title	ジョン・アースキンのグレート・ブックス論
Sub Title	John Erskine's ideas on great books
Author	安藤, 真聡(Ando, Masato)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.67 (2009.) ,p.45- 58
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000067-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジョン・アースキンのグレート・ブックス論

John Erskine's Ideas on Great Books

安藤真聡*

Masato Ando

The purpose of this paper is to analyze John Erskine's ideas on Great Books. It is widely known that Erskine was a vociferous proponent of the Great Books Program, a liberal education program which consists of reading classics and discussing them.

Erskine introduced "General Honors," a great books program at Columbia University in 1920. Moving next to the People's Institute of New York, the great books program expanded to the University of Chicago and St. John's College in Annapolis in the 1930s.

In the previous studies concerning the Great Books Movement, Robert M. Hutchins, the president of the University of Chicago, and Mortimer J. Adler, Hutchins's sworn friend have been the main focus. However, it was Erskine who originally constructed the Great Books Program. This is the main reason why this paper focuses on Erskine.

There are two sections in this paper. The first describes the circumstances in introducing General Honors at Columbia University. The second scrutinizes Erskine's ideas on great books.

1. はじめに——問題の所在と本論文の視点

アメリカ合衆国では、1980年代以降、高等教育カリキュラムにおけるグレート・ブックス・プログラムの位置づけ・意味づけをめぐり、活発な論争が繰り広げられている。1987年にはA・ブルーム (Alan Bloom, 1930-1992) が『アメリカン・マインドの閉塞』(*The Closing of the American Mind*)¹⁾ を発表し、伝統的なグレート・ブックス・アプローチへの回帰を唱導する一方で、1988年にはスタンフォード大学が西洋中心主義的な一般教育カリキュラムの改編を実施し²⁾、全米を巻き込んだ多文化主義論争をエスカレートさせた³⁾。

西洋中心主義的なグレート・ブックス・プログラムは、激化する「文化戦争」の下、激烈な批判を受

*慶應義塾普通部教諭

け続けてきた。しかしながらこのことは、文化的な多様性を前提とした一般教育プログラムの再構築について、必ずしも明確なコンセンサスが得られつつあることを意味する訳ではない。実際、イェール大学ロースタールのディーンであったA・T・クロンマン (Anthony T. Kronman) は、2007年、『教育の終わり——なぜ我々のカレッジと大学は人生の意味に見切りをつけたのか』(*Education's End: Why Our Colleges and Universities Have Given up on the Meaning of Life*)⁴⁾と題するセンセーショナルな著作を発表し、文化的多様性を基準としてカリキュラムを構造化することが、かえって自由な知的・道徳的探求を阻害していると批判を展開するとともに、自らの台座を批判的に吟味し、人生の意味をめぐる探求を誘発する格好の媒介物として、西洋思想の伝統を擁護している。グレイト・ブックスに内在する知の文化的バイアスをめぐる論争は、依然として終結の兆しすら見えていないのである。

このようなグレイト・ブックスをめぐる論争の激化を一つの背景として、アメリカ合衆国では、近年、グレイト・ブックス・プログラム史に立ち返り、その歴史的な意味・意義を再評価しようと試みる研究が立ち現れている。なかでも脚光を浴びているのが、コロンビア大学のジェネラル・オナーズ・コース導入 (1920年) を嚆矢とし、ニューヨーク市のピープルズ・インスティテュートを経て、シカゴ大学、ヴァージニア大学、そしてセント・ジョーンズ・カレッジへと波及する「グレイト・ブックス運動」(The Great Books Movement) 史研究である。

例えば、W・N・ハーロウ (William N. Haarlow) は、これまでのグレイト・ブックス運動史研究において等閑に付されていたヴァージニア大学に光をあて、セント・ジョーンズ・カレッジの「ニュー・プログラム」(The New Program)⁵⁾へと引き継がれるグレイト・ブックス運動の一系譜を解き明かしている⁶⁾。T・レイシー (Tim Lacy) もまた、グレイト・ブックス運動の中心人物の一人であったM・J・アドラー (Mortimer J. Adler, 1902-2001) を機軸として、グレイト・ブックス運動の再描写を試みるとともに、「グレイト・ブックスはアメリカ合衆国における民主主義的な文化という観念を支えていたのだ」と評価している⁷⁾。筆者もまた、アドラーのリベラル・エデュケーション論を紐解きながら、多元文化社会にふさわしいグレイト・ブックス論のあり方を、アドラーの理論を一つの手掛かりとして考察を進めてきた一人である⁸⁾。

ただし、これまでのグレイト・ブックス運動史研究は、シカゴ大学学長R・M・ハッチンズ (Robert Maynard Hutchins, 1899-1977)⁹⁾ やアドラーにスポットライトをあてる一方で、同運動の端緒として位置づけられる「ジェネラル・オナーズ」コース創設を導いた英文学者J・アースキン (John Erskine, 1879-1951)¹⁰⁾ のグレイト・ブックス論を、必ずしも十分に吟味してこなかった。実際、グレイト・ブックス運動を射程に包摂した先行研究のなかで、アースキンの思想を中心に、且つ詳細に取り上げたのは、管見の限りJ・S・ルービン (Joan Shelly Rubin) の『中流文化の形成過程』(*The Making of Middle/brow Culture*)のみである。ルービンは、アースキンの生涯を時系列的に追いながら、読者自身の経験に照らして書物を吟味する必要性を提唱するアースキンの読書論が、師G・E・ウッドベリー (George Edward Woodberry, 1855-1930) の理論に強く影響を受けているものであることを解き明かすとともに¹¹⁾、「すべての学士号受領者が熟知しておくべき書物の統一体 (a body of writing) が存在するという想定」に立った人物として、また、「教育への多様なルート」を提供する「科目選択制に挑」みかかり、「より平等主義的でない政策、すなわちファカルティによって下賜され、適性、バックグラウンド、就職の計画——言うまでもなくジェンダー、人種、階級、エスニシティ——に関わりなく、すべての人のためのものとして推奨された、凝り固まったシラバスへの回帰の合図を送った」人物として、アースキ

ンを位置づけている¹²⁾。

しかしながら後述するように、アースキンは、既存の文学研究・教育に対する批判と、学士課程教育における共通経験再構築の必要性という素朴な視点からジェネラル・オナーズの創設を導いており、ルービンの描出するアースキン像は、再考の余地があると考えられる。

本稿では、これまでスポットライトを浴びることの少なかったアースキンのグレイト・ブックス論に改めて立ち返り、その背景と内容を解き明かす。アースキンが、如何なる理由に基づいてグレイト・ブックス・プログラムの必要性を主張しているのか、アースキン自身の視点に立ってその文脈とロジックを詳らかにすることで¹³⁾、グレイト・ブックス運動史理解に一条の光を照射することを試みたい。

2. 「ジェネラル・オナーズ」の導入経緯

2-1. 学士課程学生の無知

まずはじめに、コロンビア大学における、ジェネラル・オナーズ導入に至る経緯を簡単に確認しておくことにしよう¹⁴⁾。アースキンは、回顧録『教師としての私の生涯』(*My Life as a Teacher*)のなかで、「ジェネラル・オナーズ」コースの原案を思い立った1910年代を振り返って、以下のように述べている。

尊敬の念ではなく、もちろん遺憾の念をもって若い世代の文学的な無知について言及することが、私の多くの年長の同僚たちの間での流行となっていた。彼ら（引用者註：若い世代の人々）は、我々が提供するアメリカ文学や英文学のコースにおいては非常に良い成績をとるのであろう。しかし彼らの批判者たちが言うところでは、彼らは聖書やホメロス、ウェルギリウスやダンテ、或いはあまねく世界が長く尊んできたようなその他の巨人について、ほとんど知らないか、或いはまったく知らなかったのである¹⁵⁾。

アースキンは、若い世代の文学的な無知への悲嘆のこだますこのような状況において、後述する2つの理由（現行の文学研究・教育への批判及び学士課程教育における共通経験の再構築の必要性）から、学士課程3年・4年次の2年間において、「1週間に1冊のグレイト・ブックスを読み、2時間か3時間は続くであろう毎週の会合でそれについて語り合うというシンプルな原則」に基づいた新たなコースの導入を思い立った。そして、「ファカルティ・ミーティングにおいて、勢いよくこの見解を披露した」のである¹⁶⁾。

このアースキンの提案に対しては、数名の同僚たちから、ファカルティ・ミーティングの場で、また、その後も継続的に、幾つかの痛烈な批判を浴びせられることとなった。「翻訳版でホメロスを読むということは、ホメロスをも何も読まないのと同じことになるだろう」といった批判や、「偉大なる著作者について2時間議論をしたところで、彼を学術的に理解するには不十分である」といった批判が、その内容である。ただし、ファカルティ・ミーティングにおける全般的な反応は、概ね好意的なものであった。同僚たちが好意的な反応を示した理由として、アースキンは以下の2つの点を指摘している。一つは、当時ファカルティによって頻繁に行われていた「若い世代に対するもともと問責は、(彼らの)学識の欠如にではなく、グレイト・ブックスを読むことに対する嫌気に向けられていた」(括弧内は引用者による)こと。もう一つは、アースキンがファカルティ・ミーティングの場で行った、「読むことで偉大なる著述家について知ることと、彼らについて学術的に研究することの大きな差異を我々は思い

起こすべきである」という提案が一定程度奏功したことである¹⁷⁾。

グレイト・ブックス・プログラムを学士課程教育に「導入」しようと試みるアースキンの提案は、その後「教授に関する委員会」(The Committee on Instruction)での審議を経て具体化され、その内容は、ファカルティ向けのニューズレターである『コロンビア・カレッジ・ガゼット』(*Columbia College Gazette*)誌上で報告されている¹⁸⁾。ただし、アメリカの第一次世界大戦参戦をめぐる社会状況の変化と、アースキン自身が連合軍遠征軍大学(A. E. F. University)のディレクターとしてフランスのボースに赴任するという事情も相俟って、コロンビア大学におけるグレイト・ブックス・プログラム導入という試みは、いったんペンディングの状態となった¹⁹⁾。

2-2. 「ジェネラル・オナーズ」の誕生

アースキンの提案が、再度ファカルティ・ミーティングで俎上に載ることになるのは、第一次世界大戦後のことである。アースキンは、1919年、ボースから帰国し、コロンビア・カレッジに復帰すると、すぐさま同カレッジのファカルティに対し、1920年からグレイト・ブックス・コースを試行する許可を求めている。グレイト・ブックスをどのように定義するのか、という難題を孕みながらも、アースキンの提案は最終的にファカルティによって認可されることとなった²⁰⁾。

週に1冊のグレイト・ブックスを読み、その内容について語り合うという新たなコースは、「ジェネラル・オナーズ」の名の下に、1920年に開講された。ジェネラル・オナーズの履修要件については、『コロンビア・カレッジ・アナウンスメント』(*Columbia College Announcement*)の1920-1921年度版にその概略が記されているので、簡単にその内容を確認しておくことにしよう。

ジェネラル・オナーズ・コースは、専門職向けのプログラムに在籍していない学生を対象としており、卒業予定日より少なくとも2年以上前にディーンないしオナーズのディレクターに相談をし、オナーズ(優等学位)の候補資格を認められた学生のみ履修することができるコースであった。オナーズの候補者達は、オナーズ・コースを履修する4学期間、毎週1回、定められた曜日の夕方に一同に会し、その週に課された共通の読書課題に基づいてディスカッションを行い、各学期に少なくとも1本のレポートを提出することが義務付けられていた。また、その成果については、オナーズ・コースの包摂する領域から出題される最終試験で評価されることになっていた²¹⁾。

アースキンも含むコロンビア・カレッジのファカルティによって編纂された、ジェネラル・オナーズ・コースの開講当初のリーディング・リストを紐解いてみると、例えばホメロスの『オデュッセイア』、プラトンの『国家』、アリストテレスの『倫理学』、トマス・アクィナス『対異教徒大全』、シェイクスピアの『リア王』、ホップズの『リヴァイアサン』、カントの『純粹理性批判』、そしてマルクスの『資本論』など、西洋の錚々たる古典的名著があげられている²²⁾。ただし、アースキンは、「こうした書物について読むことは、歴史や経済学、或いは文学についての訓練となるものではない——我々は、如何なる教科や専門分野も、ここですべからく提示されていると示唆したい訳ではない」と述べ²³⁾、「ジェネラル・オナーズ」が、特定の分野についての知識を教えるためのものではないことを明言している。

3. J・アースキンのグレイト・ブックス論

それでは、アースキンのグレイト・ブックス論を紐解くことにしよう。アースキンは、既存の文学研

究・教育に対する批判と、学士課程教育における共通経験再構築の必要性という視点から、独力で名著を読み、そして語り合うグレート・ブックス・プログラム導入の必要性を主張している。以下、まず、アースキンの文学研究・教育批判の概要と、そのような批判の前提となるアースキンのグレート・ブックス観を解き明かす。その上で、グレート・ブックス・プログラムを通じてアースキンが、ささやかながらも再構築を試みようと考えた、学士課程における共通経験の内実を明らかにすることとしたい。

3-1. J・アースキンの文学研究・教育批判

アースキンは、1928年に記された『グレート・ブックスの愉しみ』(*The Delight of Great Books*)²⁴⁾において、アメリカの高等教育機関における文学研究の動向について、以下のように述べている。

多くの人々が、作家の生涯についての研究が、彼の作品の理解に不可欠であると考えている。もしそうであるならば、彼が執筆をした社会の状況や、彼を統制した政治的或いは経済的或いは哲学的な理想について知ることまた、利点となるであろう。最近では、その著者を心理分析するならば、彼の本をより理知的に読むことができるであろうと言われている。もちろん、その本が古いものであるならば、我々は言語学者になり、彼が書いた言語を習得する必要があるであろう²⁵⁾。

アースキンは、「作家の生涯」、「彼が執筆をした社会の状況」や「彼の書いた言語」、そして作家の「心理分析」へと踏み込むこのような文学研究の方法に対しては、一定程度の理解を示していた。実際アースキンは、上述した発言に引き続き、「伝記というものは、本来的に人を魅了するものであり、何人かの詩人は、たぐい稀なる生涯を送っている。もちろん、人間としてのミルトンやバイロン、或いはキーツについて知ることは喜ばしいことであろう」と付言し、「作家の生涯」を知る喜びそのものには同意するのである。

ただし、文学研究が、「作家の生涯」、「彼が執筆をした社会の状況」や「彼の書いた言語」、そして作家の「心理分析」という方法論に過度に傾倒するあまり、例えばシェイクスピアについて彼の戯曲を一切読むことなく講義が為されてしまいうるという文学教育の現状に対しては、真っ向から異を唱えている。「我々が真にその名（引用者註：文学）の下に教えているものは歴史である」と皮肉り、「アメリカ合衆国において、文学が芸術として教えられている教室を、私は殆ど知らない」と嘆くのである²⁶⁾。

この点アースキンは、伝記を読む喜びそのものは承認し得たとしても、我々が作家としての彼らについて知ることのできるものは、彼らの著作をしてより他にないと主張する²⁷⁾。そして、「心理分析」の手法を用いてE・A・ポー (Edgar Allan Poe) の生涯を考察したJ・W・クラッチ (Joseph Wood Krutch) の研究²⁸⁾を槍玉にあげて、以下のように批判している。

最近、クラッチ氏がポーについての心理分析的な伝記を我々に供与した。言われているように、それ自体は面白く、また、その詩人について、いやむしろその人について、我々の理解を増強するべく計算されている。心理分析が科学であり、クラッチ氏の焼印が正しいものであるとするならば、ポーがある種のコンプレックスや抑圧を抱えていたということ、我々はその本から知ることができる。（しかしながら）一体全体そのことが、彼の詩といかなるかわりがあるというのであろうか。彼以外の人間もまた、しばしば同じようなコンプレックスや抑圧——それは心理分析家た

ちが彼らについて知る方法である——を抱えてきた。しかしながら、彼以外の人々は、ポーがしたように著述しはしなかったのである。彼を作家として重要ならしめているものは、そもそも彼が他の人々とは共にすることのない彼の素質の成分なのである。文学やその他の芸術的な天分は、人間の生涯においてではなく、彼が生み出す作品のなかにこそ立ち現れるものなのである²⁹⁾。(括弧内及び傍点は引用者による)

上述したクラッチに対する批判にも如実に現れているように、アースキンは、「様々な歴史に関わる学識」というものが、「傑作が存在へと変化した方法について、我々に何も伝えはしない」と考えていた。この点、アースキンは、「伝記が文学的な業績について殆ど本質的な光を投じないにもかかわらず、それでもなお多くの思慮深い人々が、我々は書物が生み出されたときの人民の状況や、その時代の思想及び情緒を知るべきであると信じ続けてきた」と嘆いた上で、次のように問いかけている。「もしホーソーンが超絶主義者とともに生きていなかったならば、彼は『緋文字』において、彼らの理論について、たいして多くの疑問を投げかけなかったかもしれない。もしミルトンの時代が、離婚の問題に関心をもっていなかったなら、彼の偉大なる詩において、彼は夫や妻の関係について多くを語らなかったかもしれない。しかし我々は、このようなことについてどこまで行くべきなのであろうか。そして、それは何を意味しているのであろうか」と³⁰⁾。アースキンは、さらに続けて、以下のように述べている。

詩人が用いた言語の知識は、彼の仕事の紹介の一要素とされるべきである、と唱える学者たちは、より強い言い分をもっているように見える。チョーサーを読む前には、あなたは中英語を知っておかねばならない。その通りだ。そして、シェイクスピアについて知る前には、あなたは同様にエリザベス期の英語を知っておかねばならない。また、テニソンについて知る前には、あなたは50年前の英語について知っておかねばならない。加えてゴールズワージーについて知る前には、我々アメリカ人は英語について知っておかねばならない。しかしたとえ私がこうした著者たちそれぞれの言語について知っていたとしても、私はさらに、彼らの隣人かつその本が世に出た時代の同時代人の一人という立場にならなければならない、さらに私はそれを読み、英語の知識ではなく、人生の経験によってそれを解釈しなければならないのである³¹⁾。(傍点は引用者による)

このようにアースキンは、「作家の生涯」やその「心理分析」、「彼が執筆をした社会の状況」や当時の「言語」を媒介として文学作品にアプローチしたとしても、その作品を芸術たらしめているものを詳らかにすることはできず³²⁾、また、個々の作品は、依然として読者自身の「人生の経験」によって読み解かれなければならない、と考えていた。彼によれば、昨今の文学研究の潮流こそが、読者をグレイト・ブックスから遠ざけてきた元凶であり、「グレイト・ブックスを読み、楽しむことに捧げられたかもしれない時間を強奪する³³⁾」ものであった。この点、アースキンは以下のように述べ、文学研究によって齎された、名著につきまとうイメージや思い込みを一旦拭い去ることの必要性を説いている。

ほとんどの人が、古典を読むことの困難さによって恐れおののいてしまっている。もし学者たちが、彼らが主張しているように、そこに非常に複雑な経験を見出すならば、平均的な人間はそれについて何を理解することができるのであろうか。しかしあなたが偉大な詩の、小説の、そして戯曲の

殆どから著者の名前を取り去り、まだ学識によりややこしくされていないものとして、その作品の質を試すよう理知的な読者に要求してみるならば、彼は恐らくその中に、我々の時代に至るまでその名声を維持してきたものと同様の長所を見出すことであろう。私は、私の読者には、我々が討議することになる書物について、この単純さとこの自信をもってアプローチして欲しいと思う³⁴⁾。

3-2. J・アースキンのグレイト・ブックス観

3-1で見たように、アースキンは、グレイト・ブックスは、周辺情報や思い込みを排し、読者自身の「人生の経験」によって読み解かれなければならないと主張している。ここでは、前述した文学研究・教育批判の前提となる、アースキンのグレイト・ブックス観を確認することにしよう。

アースキンは、「芸術というものは、芸術家と聴衆の間の絶えざるコラボレーションであり、文学における芸術作品もまた、芸術家と読者の間の絶えざるコラボレーションによって育まれてきたものであると考える。例えばシェイクスピアがプルタルコスを源泉 (sources) としてアントニウスとクレオパトラについて記したように、また、ミルトンが『創世記』を源泉として『失樂園』を著したように、創造的な鬼才は、オリジナルのプロット (an original plot) をリライトすることで創作しており、このような意味において、文学というものは常に「著者たちの手のなかで変化するもの」であると同時に、「読者の手のなかで変化するもの」でもあると彼は考えるのである³⁵⁾。

アースキンによれば、「ひとたび作品が生み出されるや否や、作品は著者の手を永久に離れ、読者はそれを改鋳するか、或いは放置してしまう」。つまり読書とは、「我々が我々のニーズに応じて書物を継続的に再解釈」する「創造的なプロセス (an creative process)」であり、グレイト・ブックスとは、「誕生、死、飢え、愛、憎しみ、二つの性」といった、人間の本性 (human nature) に関わる不変の課題を包摂し、読者による継続的な再解釈に耐え続けてきた書物であるというのである。従って、「我々は偉大な詩歌や小説のなかに、我々自身の似姿 (reflection) を必ずや見出すことができる (should find)」。アースキンによれば、我々は、人生が我々に与えてきたもの以外の準備をすることなくグレイト・ブックスと向き合うべきであり、我々は、ただグレイト・ブックスの扉を開き、「私に対して、それらがどれほど多くのものを意味するかを感ずる」だけでよい。そうアースキンは考えるのである³⁶⁾。

もちろん書物のなかには、我々の経験を反映する部分もあれば、容易には理解することのできない箇所もある。もっとも、アースキンの見方に立てば、そのような読めない箇所 (blind spot) については、書物が「時代遅れになっている」か、我々自身の経験が、「その書物のそうした箇所が扱っている領域についての経験が恐らくは希薄である」に過ぎない。したがって、「偉大なる著作者たちはあまりに賢く、あまりに深遠すぎて、我々に彼を理解することはできないと想定することは、致命的である」。そうアースキンは結論づけるのである³⁷⁾。

文学というものは常に「読者の手のなかで変化するもの」であり、故にグレイト・ブックスの読者は、背景的知識に頼らず、ただ自身の「人生の経験」のみに照らして読み、「それらがどれほど多くのものを意味するかを感ずる」だけでよいと考えるアースキンのグレイト・ブックス論は、奇しくも1940年代にアメリカ合衆国で勃興する「新批評 (New Criticism)」の言説を、部分的に先取りするものであった。周知のごとく「新批評」とは、「歴史や心理学や、作者の伝記的事実や、読者に与える影響などの外在的要因を排して、詩を詩としてそれだけで読む」べきとする、アメリカ南部出身のモダニス

ト詩人を中心とするグループによって提唱された批評方法である³⁸⁾。作品そのもの、つまりテキストを研究の中心におき、それを芸術として考察すべきであると主張するこの新批評の論敵は、アースキンが対峙する論敵と同じく、文学を「教養的な学問（たとえば歴史、言語学、伝記）を行う機会を主として与えるもの」として想定する学者たちであった³⁹⁾。

グレイト・ブックスを、読者の「人生の経験」によって理解可能な身近な書物として位置づけ直すアースキンの主張は、「新批評」も廃れて既に久しいこんにちの我々からしてみれば、ややもすれば稚拙で平面的なものに映ってしまうかもしれない。しかしながら1930年代までの文学研究を支配した、伝統的な批評方法の行き過ぎを象徴する以下の噂話的なエピソードの内容を鑑みることで、1920年代に唱えられた、作品そのものの精読へと読者をいざなうアースキンのグレイト・ブックス論の同時代的な意義を、より精緻に理解することができるのではなかろうか。

ある有名な東部の大学の教授が、ある日教室に入ってきて、この時間はアンドルー・マーヴェルの詩「はにかむ恋人に」をとりあげるつもりであると告げた。それから、教授は、マーヴェルの政治、宗教、経歴について論じた。教授は、マーヴェルという人物を評し、友人からも敵対者からも尊敬されたことに触れ、そして結婚していたかどうかについて考察した。ここまできた時、授業終了のベルがなった。教授はノートをとじ、顔をあげ、にっこり笑って、「実にすばらしい詩だ、諸君。とてもすばらしい」と締めくくった⁴⁰⁾。

3-3. 学士課程における共通経験の再構築

グレイト・ブックス・プログラム導入を構想するアースキンの主張には、3-1及び3-2で確認したような文学研究・教育批判、グレイト・ブックス観のみならず、科目選択制によって消滅の危機に瀕している、学士課程における学生の共通経験を再構築しようという意図が前提とされていた。この点アースキンは、『ニュー・リパブリック』(*The New Republic*)誌に寄稿した「コロンビアのジェネラル・オナーズ」("General Honors at Columbia")と題した論稿のなかで、かつてのカレッジの姿を振り返りつつ、懐旧の念を込めて以下のように述べている。

必修科目 (required courses) の時代には、学士課程の学生たちは授業から授業へと足を運びつつ、彼らの問題に連れ立って取り組んでいた。9時のギリシャ語、10時の三角法、11時の歴史の時間には、ブラウンはバーンズの隣に、スミスはスミザースの隣に座っていた。彼らは彼らの生活の行き過ぎた共通点に不平を言っていたかもしれない。しかしながら、彼らが古典について、数学について、歴史について知っているものを、彼らは共にそれを知っていたのである。彼らの運動や彼らの寮、彼らの食事のみならず、精神の冒険もまた、すべての者によって共にされていたのであり、カレッジは、一つの知的な世界において思考し、話をする能力を彼らに与えていたのである⁴¹⁾。

しかしながら、科目選択制が導入されたことによって、学士課程における学生生活は以下のように一変したとアースキンは指摘する。

ある教室では彼はブラウンの隣に座り、次の時間、彼はジョーンズの隣に彼自身を発見する。3時限目には、彼はスミスの隣にいる。彼がブラウンと会うならば、彼はもちろん1時限目の教科についてブラウンと議論することができる。2時限目の教科についてはジョーンズと、3時限目の教科についてはスミスと議論することができる。しかしその労力は普通の少年には極めて大きすぎるものであり、故に彼は彼ら全員が共通にもつもの、彼らが依然として伝統としてもつ何物か——少女たちのことや陸上競技、或いは強制的な礼拝の時間 (compulsory chapel)——について議論をする。このようなものは、彼らの魂に最も近い教科ではないかもしれない。しかし人間が満足して語るためには理解されなければならない、彼らは彼らの専門性を避け、彼ら全員が理解することのできるものに固執する。彼らの真剣な研究は社会的な (social) ものではなく、私的な (private) ものなのである⁴²⁾。

アースキンは、科目選択制によって「私的な」営みへと転落してしまったこの学士課程教育における学びを、限定的にはあるが、グレイト・ブックス・プログラムの導入によって、「社会的な」営みへと回復させることを企図していた。

前述した通り、ジェネラル・オナーズを履修する学生はすべて、週に1度集い合い、インストラクターを交えつつ、夕刻に2時間かけてグレイト・ブックスについて語り合う。ジェネラル・オナーズにおいては、インストラクターが進行役を務めるものの、ディスカッションは原則として野放し (free-for-all) に行われ、そこでは学生同士が、自らの経験に照らして読み込んだグレイト・ブックスについて、真の意味での自由な意見交換を行うことができる。このような同一の書物を媒介とした学習経験を共有することで、嘗てのカレッジの学生たちがそうであったように、「彼らは、ランチ・ルームであれ、教室から教室へと歩きながらであれ、ソーダ水売り場であれ、彼らが出会うときはいつでも、自然とそれについて議論する」ようになる⁴³⁾。

アースキンは、このジェネラル・オナーズでの学びを経て、「クラスの少年全員が、注目に値するほどに膨大な量の、文学や人生についての情報・思想、そして恐らく美的な情緒についての均等な財産を、共通にもつ」ことを望み、「知識に対する社会的な関心 (social interest)」、そして「人間についての理解とコミュニケーションのための真の学術的かつ文化的な基盤」が育まれることを期待していた。彼は、同時代の文学教育の潮流を念頭に入れつつ、以下のように述べている。「このような結果と比較するならば、1冊の書物ないし1人の著者について細部にわたって精通し、またその精通を独力で、いわば孤独のうちに獲得するために1学期ないし1年間を費やすということが、如何に時間の無駄に思えることか」と⁴⁴⁾。

R・ガイガー (Roger Geiger) が指摘するように、1920年代は、アメリカ高等教育において、「カレッジ・シンドローム」 (the collegiate syndrome) とでも呼ぶべき現象が立ち現れ、「アメリカの教育者が、着想を求めて同盟国イングランドに目を向けた」時代であり、また、「学寮 (residential colleges) やチューター、そしてオナーズ・ディグリーが潜在的なイノヴェイションの鑄型となった」時期であった⁴⁵⁾。オナーズ・コース導入を通して学士課程における共通経験の再構築を企図するアースキンの試みは、このような「カレッジ・シンドローム」の始まりを告げる一つの先駆けの試みとして位置づけることができるであろう⁴⁶⁾。

4. おわりに

「ジェネラル・オナーズ」を嚆矢とするグレイト・ブックス・リバイバルは、その後アースキンの愛弟子アドラーを介してシカゴ大学へと波及し、1937年にはセント・ジョーンズ・カレッジにおいて、科学分野や数学分野も含む4年間の学士課程教育を、グレイト・ブックスのリーディング・リストを中核として構成する「ニュー・プログラム」が導入されることになる。

アースキン自身は、1928年にジュリアード音楽院 (Julliard School of Music) の学長に就任して以降、1940年代以降に相次いで回顧録、自叙伝を出版するまで、グレイト・ブックス運動の盛り上がりについて、特段目立った発言を行っていない。もっともアースキンは、1947年に著した『幾人かの人物についての記憶』(*The Memory of Certain Persons*) と題する回顧録のなかで、明らかにアドラーやその盟友ハッチングス、セント・ジョーンズ・カレッジ学長のS・バー (Stringfellow Barr, 1897-1982) や学生部長 (dean) のS・ブキャナン (Scott Buchanan, 1895-1968) らを意識して、以下のように苦言を呈している。

グレイト・ブックスを読むという私のこのコースは、多くのカレッジで採用されてきたが、必ずしもいつも私の意図した通りではなかった。多くの教師たちがそれを哲学についての、ある特定の哲学についてのコースへと変化させ、また、それ以外の人々は、すべての教科を教えるための教育メソッドへとそれを拡張しようと試みてきたのである。このような逸脱について、私はまったく共感しない。科学は、実験室で学ばれるべきであり、実験室が存在する以前の科学に向かうような、文字で書かれた手探りの探索によって学ばれるべきではないと私は考える。一つの哲学によって、歴史におけるすべての人種的な、そして個人的なヴァリエーションを混ぜ合わせることは、我々が正確に観察をし、識別をすることを可能にする精神の訓練を放棄することであると私は考える。総体的な教育 (total education) のための哲学やメソッドについて、私は何も関心がない。私はただ、どのように読むかを教えることを希望していただけなのである⁴⁷⁾。

このようなアースキンの言葉によっても端的に象徴されているように、グレイト・ブックス運動は、アースキンの試みを端緒とするものでありながら、やがてアースキンの手を離れるとともに、彼の初発の動機とはかけ離れた方向へと突き進んでいった。本稿でみてきたように、アースキンによるグレイト・ブックス・プログラムの提唱は、既存の文学研究・教育に対する批判と、学士課程教育における共通経験再構築の必要性という二つの視点に基づくものであった。アースキンが真に重要だと考えていたものは、グレイト・ブックスを通して伝達される知識や情報ではなく、また、彼の真意は、グレイト・ブックスを通して「総体的な教育」を提供しようという野心的なものでもなかった。アースキンの意図は、ただグレイト・ブックスを周辺情報に頼らず人生経験に照らして読み、そして語り合う機会の創出という、実にささやかなものであったのである。このようなアースキンの意図を鑑みるならば、アースキンを、ルービンが言うような「すべての学士号受領者が熟知しておくべき書物の統一体 (a body of writing) が存在するという想定」に立ち、「凝り固まったシラバスへの回帰の合図を送った」人物として位置づけることは必ずしも妥当ではなからう⁴⁸⁾。

前述したように、西洋中心主義的なグレイト・ブックス・プログラムは、20世紀末に始まった文化

戦争下において、集中砲火を浴び続けている。しかしながら、もし学生達が、人生経験に照らして書物を読み込み、語り合う機会が保証されるならば、そして読み込まれる書物が、我々自身の似姿を必ずや見出すことができるものであるならば、アースキンは、西洋中心主義的なリーディング・リストの改訂に同意したのではなかろうか⁴⁹⁾。本論文でトレースを試みた、グレート・ブックスをめぐるアースキンの言説は、このような示唆を我々に提供しているといえよう。

付 記：本稿は、平成20年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による助成を受けた「アメリカ合衆国におけるリベラル・エデュケーションの史的展開に関する研究」の研究成果の一部である。

注

- 1) Allan Bloom, *The Closing of the American Mind: How Higher Education Has Failed Democracy and Impoverished the Souls of Today's Students*, New York: Simon & Schuster, 1987. 『アメリカン・マインドの閉塞』の思想的なインパクトの大きさは、その後「アメリカン・マインドの始まり」(*The Opening of the American Mind*) や「アメリカン・マインドを開く」(*Opening the American Mind*) といった、しばしば「アメリカン・マインドの閉塞」をもじった書名の批判書が断続的に刊行されていることから伺い知ることができる。Mortimer J. Adler, *Reforming Education: the Opening of the American Mind*, New York: Macmillan, 1988. Geoffrey M. Sill et al., *Opening the American Mind: Race, Ethnicity, and Gender in Higher Education*, Newark: University of Delaware Press, 1993. Lawrence W. Levine, *The Opening of the American Mind: Canons, Culture, and History*, Boston: Beacon Press, 1996.
- 2) スタンフォード大学のカリキュラム改革とその全米的なインパクトについては以下の文献に詳しい。松尾知明「高等教育カリキュラムと多文化主義—スタンフォード大学の事例を中心に」『比較教育学研究』第25号, 1999年, 151-168頁。
- 3) アメリカ合衆国における1980年代以降のリベラル・エデュケーション論争や、ブルームの教育思想については、中村夕衣による一連の論稿を参照されたい。中村夕衣「『多文化状況』における教養教育論の課題—アメリカの大学における『教養=文化』概念の諸解釈をめぐって—」『現代社会理論研究』第15号, 2005年10月, 24-36頁。中村夕衣「教養教育の理念における合意に向けて—B. A. キンバルの歴史研究を手がかりに—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第52号, 2006年, 122-134頁。中村夕衣「A・ブルームの大学論におけるポストモダン—『哲学』の場としての『大学』の可能性」『教育学研究』第75巻第1号, 2008年3月, 1-12頁。中村夕衣「アラン・ブルームのみる学生の『寛大』と『無関心』—『コミットメント』から『エロス』へ」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第54号, 2008年, 331-344頁。中村夕衣「近代性の危機とグレート・ブックス論—レオ・シュトラウスからアラン・ブルームへ—」『教育哲学研究』第98号, 2008年11月, 1-19頁。
- 4) Anthony T. Kronman, *Education's End: Why Our Colleges and Universities Have Given up on the Meaning of Life*, New Haven: Yale University Press, 2007.
- 5) 「ニュー・プログラム」と呼ばれるセント・ジョンズ・カレッジのカリキュラム改革の詳細については、以下の文献に詳しい。J. Winfree Smith, *A Search for the Liberal College: the Beginning of the St. John's Program*, Annapolis: St. John's College Press, 1983.
- 6) William N. Haarlow, *Great Books, Honors Programs, and Hidden Origins: the Virginia Plan and the University of Virginia in the Liberal Arts Movement*, New York: RoutledgeFalmer, 2003.
- 7) Tim Lacy, "Making a Democratic Culture: The Great Books Idea, Mortimer J. Adler, and Twentieth-Century America," Ph. D. Dissertation, Loyola University Chicago, 2003, p. xi.
- 8) 拙稿「モーティマー・J・アドラーのリベラル・エデュケーション論」『教育哲学研究』第96号, 2007年11月, 132-147頁。なお、アドラーの成人教育論におけるグレート・ブックス・プログラムの位置づけについては、以下の論稿も合わせて参照されたい。拙稿「モーティマー・J・アドラーの成人教育論」『日本社会教育学会紀要』第43号, 2007年6月, 11-20頁。
- 9) ハッチンズに重点的な焦点をあてたアメリカ合衆国における先行研究としてA・A・キャスの論稿をあげるこ

とができる。Amy Apfel Kass, "Radical Conservatives for a Liberal Education," Ph. D. Dissertation, The Johns Hopkins University, 1973. また、ハッチنزの教育思想に関する我が国における代表的な研究として、松浦良充による以下の一連の論稿の存在を指摘することができる。松浦良充「ロバート・M・ハッチنز『学習社会』論の思想的基盤—自由教育思想と公教育制度批判—」『関東教育学会紀要』第11号, 1984年9月, 28-39頁。松浦良充「ブラメルドによるハッチنز批判の検討—ハッチنز自由教育思想の再評価に向けて—」『教育研究』第27号, 1985年3月, 47-68頁。松浦良充「リベラル・エデュケーションにおける『自由』の意味—R・M・ハッチنزの場合—」『教育哲学研究』第51号, 1985年5月, 56-70頁。松浦良充「すべての人にとっての最良の教育—学習社会のリベラル・エデュケーション—」『現代思想』第17巻第8号, 1989年7月, 88-97頁。

- 10) アースキンの略歴を以下, 簡単に記す。アースキンは1879年, ニューヨーク市において生を受けた。コロンビア大学で1900年に学士号, 1901年に修士号, そして1903年に博士号を取得している。博士号取得後, 1909年までアマースト・カレッジで教鞭をとったアースキンは, その後コロンビアのファカルティとなり, 1937年まで在籍している。なお, アースキンは, コロンビア大学の教授職に従事する傍ら, ジュリアード音楽院の学長を務めている。死の直前まで執筆・創作活動に取り組んだアースキンは, 1951年6月2日, ニューヨーク市でその生涯を閉じている。Harry T. Moore, "Erskine, John," in *Encyclopedia Americana*, vol. 10, Danbury: Scholastic Library Publishing, Inc., 2006, p. 561. *Who Was Who in America*, vol. 3, Chicago: The A. N. Marquis Company, 1963, p. 263.
- 11) アースキンに対するウッドベリーの思想的影響への言及は, ルービンほど重厚な考察が付されている訳ではないが, 既にH・S・ムーアヘッドによっても行われている。Hugh S. Moorhead, "The Great Books Movement," Ph. D. Dissertation, University of Chicago, 1964, pp. 43-47.
- 12) Joan Shelly Rubin, *The Making of Middle/brow Culture*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1992, pp. 165, 167, 176.
- 13) ルービンは, コロンビア・カレッジに対して提出された「教授に関する委員会の予備的報告」に記された内容が, すなわちアースキンの主張である, と前提してアースキン像を構築している。*Ibid.*, pp. 167, 175, 350, 351. しかしながら, 同報告は, あくまでも「教授に関する委員会」の総意によって公的に記されたものであり, アースキンの主張が必ずしも全面的に反映されている, とは限らないはずである。そこで本稿では, 「教授に関する委員会」や, コロンビア・カレッジによる公式文書と, アースキンの単著で記された文献を峻別し, 後者のみを用いてアースキンの真意を斟酌することを試みる。
- 14) およそ800頁にも及ぶ博士論文でグレイト・ブックス運動を取り上げたムーアヘッドの研究は, 極めて実証的な歴史研究ということもあり, アースキンの思想の構造の考察にまで踏み込むものではない。もっとも, ジェネラル・オナーズとはほぼ同時期に開講された「現代文明」(Contemporary Civilization) コースの存在や, コロンビア・カレッジ内の議論・動向を多岐にわたって仔細に紹介している。本稿では, 紙幅の都合上, 論旨に関わるものに絞って叙述をしており, ジェネラル・オナーズの導入前後の詳細な状況についてはムーアヘッドの論文を参照されたい。Hugh S. Moorhead, "The Great Books Movement," pp. 42-109.
- 15) John Erskine, *My Life as a Teacher*, Philadelphia: J.B. Lippincott, 1948, p. 165.
- 16) *Ibid.* pp. 165-166.
- 17) *Ibid.* p. 166.
- 18) *Columbia College Gazette*, no. 1, December 1916.
- 19) John Erskine, *My Life as a Teacher*, p. 168.
- 20) *Ibid.*
- 21) *Columbia College Announcement 1920-1921*, February 14, 1920, p. 20.
- 22) J. Bartlet Brebner and the Honors Faculty of Columbia College (eds.), *Classics of the Western World*, Chicago: American Library Association, 1927, pp. 22-113. もっとも, アースキン自身による当初のグレイト・ブックス・プログラム創設の提案は, その経緯の叙述に際して聖書の他, ホメロスやウエルギリウス, ダンテなどの詩人の名前のみが登場しているように, 文学を中心に構想されていたと推察される。John Erskine, *My Life as a Teacher*, pp. 165-166.
- 23) John Erskine, "The Enjoyment in Reading Classics," in J. Bartlet Brebner and the Honors Faculty of Columbia College (eds.), *Classics of the Western World*, p. 9.

- 24) アースキンによって著された『グレート・ブックスの愉しみ』と題する著作のなかで、「グレート・ブックス」として語られている作品は、チャウサーの『カンタベリー物語』やシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』、ハーマン・メルヴィルの『白鯨』など、すべて文学作品である。John Erskine, *The Delight of Great Books*, Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1928, pp. 33-314.
- 25) *Ibid.*, p. 13.
- 26) *Ibid.*, pp. 12-13.
- 27) *Ibid.*, p. 14.
- 28) Joseph Wood Krutch, *Edgar Allan Poe: a Study in Genius*, New York: A.A. Knopf, 1926.
- 29) John Erskine, *The Delight of Great Books*, p. 14.
- 30) *Ibid.*, pp. 14-15.
- 31) *Ibid.*, p. 16.
- 32) ルービンも指摘するように、グレート・ブックスを読むに際して文学的な学識が不要であるという考えは、アドラーのグレート・ブックス論へと受け継がれていくことになる。Joan Shelly Rubin, *The Making of Middle/brow Culture*, p. 194.
- 33) John Erskine, *The Delight of Great Books*, p. 13.
- 34) *Ibid.*, pp. 16-17. アースキンは、1927年に発表された小論のなかでも、既存の文学研究・教育の主流をなす「独占的な歴史的アプローチ」に対する個人的な疑義を表明している。この点、アースキンは、「カレッジの学生たちとともに読書をするこのコース（ジェネラル・オナーズ・コース）の成功は、パイオグラファーや芸術についての歴史家が構築してきた遺産が、我々の大多数に、著名な書物を棚から降ろすことを恐れさせているということ、これまで以上に確信させる」（括弧内は引用者による）ものであったと述べ、アースキンの方法論の妥当性を主張している。John Erskine, “The Enjoyment in Reading Classics,” p. 9.
- 35) John Erskine, *The Delight of Great Books*, pp. 17-19, 20, 24.
- 36) *Ibid.*, pp. 24-25, 28.
- 37) *Ibid.*, pp. 28-29.
- 38) 越智博美「新批評」大橋洋一編著『現代批評理論のすべて』新書館、2006年、12頁。
- 39) W・L・ゲーリンほか著、日下洋右・青木健訳『文学批評入門』溪流社、1986年、39頁。
- 40) 同上、38頁。
- 41) John Erskine, “General Honors at Columbia,” p. 13.
- 42) *Ibid.*
- 43) *Ibid.* John Erskine, *The Memory of Certain Persons*, Kessinger Whitefish: Publishing, 2005, p. 343. John Erskine, “The Humanities in the New College Program.” *The Journal of Higher Education*, vol. 18, no. 5, May 1947, p. 231.
- 44) John Erskine, “General Honors at Columbia,” p. 13. John Erskine, *The Memory of Certain Persons*, p. 343.
- 45) Roger L. Geiger, *To Advance Knowledge: The Growth of American Research Universities, 1900-1940*, New York: Oxford University Press, 1986, pp. 115-116. なお、1920年代のアメリカ高等教育の一般教育改革の動向については、立川明による以下の論稿も合わせて参照されたい。立川明「世界大戦とカレッジの教養教育の転換」『多元文化社会アメリカの教育におけるオートノミーとコントロールに関する史的研究』（平成9・10・11年度文部省科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)研究成果報告書)）、2000年3月、148-170頁。立川明「アメリカ合衆国での人文学の復興と日本の戦後高等教育改革」『教育研究』第44号、2002年3月、1-15頁。
- 46) アメリカ高等教育史研究の泰斗F・ルドルフもまた、1920年代から1930年代に掛けての時期をカレッジからの反動が巻き起こった時代として位置づけ、その一例として、アースキンのジェネラル・オナーズ導入をあげている。Frederick Rudolph, *The American College and University: A History*, Athens: The University of Georgia Press, 1962, pp. 440-461. F・ルドルフ著、阿部美哉・阿部温子訳『アメリカ大学史』玉川大学出版部、2003年、398-415頁。なお、J・A・リューベンは、「1930年代から1940年代、大学の教育者たちは、カレッジのカリキュラムにおける統一性と価値を提供するために、生命科学や社会科学ではなく、文学、芸術、哲学、そして歴史へと着目した」と指摘し、このような動向の一つのモデルを作り出した人物として、アースキンの名をあげている。Julie A. Reuben, *The Making of the Modern University: Intellectual Transformation and the*

Marginalization of Morality, Chicago: The University of Chicago Press, 1996, pp. 228–229.

- 47) John Erskine, *The Memory of Certain Persons*, p. 343. K・H・ハンセンは、このような不満を斟酌し、アースキンは「今日存在している (as it exists today) グレイト・ブックス・プログラムの始祖であることを恐らく認めるであろうが、彼は事実上の親子関係を否定するであろう」と指摘している。Kenneth Harvey Hansen, “The Educational Philosophy of the Great Books Program,” Ph. D. Dissertation, University of Missouri, 1949, p. 39.
- 48) ルービンもまた、アースキンがグレイト・ブックス・プログラムを通じて「洞察と関心を共有する人々の実在する集団」の創出を意図していたことについて、言及を行っている。Joan Shelly Rubin, *The Making of Middle/brow Culture*, p. 169. しかしながら、このような集団の創出が、「総体的な教育」の提供という壮大な視点に立つものなのか、領域限定的な提案に留まるものなのかという点は、アースキン理解の形成に際して、また、グレイト・ブックス運動のキー・アクターたちの思想的連続・不連続を精緻に解き明かす上で、重要な分水嶺であると考えられる。
- 49) アースキンは、「あらゆるなかなかに知的な人間は、如何なる書物（もちろん高度に専門化された科学を除く）も、読んで益するところがあり得る」（括弧内原著）と述べており、西洋の古典に対する拘りは、必ずしも強くはなかったのではないかと推察される。J. Bartlet Brebner and the Honors Faculty of Columbia College (eds.), *Classics of the Western World*, p. 7. また、「間違いなく、我々は古代と現代の科学者たちや哲学者たちのグレイト・ブックスを読むべきである」と述べ、古の書物のみならず、比較的最近に著された書物をも読み込むべきである、と主張している。John Erskine, *My Life as a Teacher*, p. 166. なお、アースキンの薫陶を受けたアドラーは、多文化主義の台頭を受けて、追加のグレイト・ブックス・リストの中に、M・L・キング・ジュニアやT・モリソンのようなアフリカン・アメリカンの著作者、J・L・ボルヘスやP・ネルーダのようなラテン・アメリカの著作者を組み込んでいる。Mortimer J. Adler, *Second Look in the Rearview Mirror: Further Autobiographical Reflections of a Philosopher at Large*, New York: Macmillan Publishing Company, 1992, p. 168.